三井寺

次第 よるひるわかぬみな我きくやく

仏の法なるらん ワキ詞 か様さは

是ハ於横國四代とやとくれに

ろ其きや字曉中考みてなぎ五秋

善光寺の如来ハ一七日参籠

申てそれよりうちは信濃具夢を

鄕里てんかと母か先よわ河内國

八行上

太師寺へ参りや覧おりひは
ひくをやひきしのゝ冴え
世中をぐまさ思ひの外墨衣
きのふの山をあとに見てなをを
行方見えぬ雲の海も見えしふ
面影ぞ日かくれ乃夢つるよわ
ありし神も見や河内なりし濃

長月乃
里よも黒ゆくわく
色も稍の秋をえて照や紅葉乃
り乃さとゝ なる我鳴残るをとゝ
とそや松風ひとさ聲くはうせ
見ふ出ふる老人みせ里の以も
太師寺乃佛神に法りへ中あや
乃歎や利生ハ様とおかき秋わ

わきて誰ひもかけたる天満
神の宮寺にあゆみをはこふ
清値遇りよ力をまきに心なから
まつりためえた乃もや
下　いさやあ遊はんとはこりなく
上　神さふ松太千のへ里ちる乃
秋く霜をきまてきたくえ乃

露乃身なりへて神は
清かへまゐる宮路の末錦乃
ふの森ちらひそめ尾さやく
口平詞　いはふ三の松の霜人まへさき
三下詞　すめる乃この手まもれたの
口平　何事まてるう光ハ万代るの
如来の清発遣ふよわかはく

當るに參りてさんざる中の人あり
なひ中は、愛恋のやまをりしつまと
ゆくゆく 与詞 不思議の縁有を
度は物かたりに御尊意の様を得
やさ人まは物語なんぐ來迄して
寺中の人々への詠め中は庵し
ワキ 慈悲しやなさるゝハ無申へし

ジテ 寺中の人々ゝかはひろめぬとん
似は中は 物語 見ハ於様國田代と
ゆ所ふうす志や京とゆひしつま
まそはりぎ郡三佛性生乃似さし
きみよわば度候深國善覚さへ
ちいまご七の宗龍中にもよ然末
みはし乃はやなせひつむかう語

これにのう乃蘇悉のけ給ひける
き僧のあらたなる感應あらはれ
ぬ念佛往生殊さら樣さし候ふ
思ぼしけらハ西幾内河内國
土師有天神乃住生所なり
ば土師よ神明を始めとし七社の
神〳〵を勧請申させたまひき

天神を一切衆生現當二世乃為
に五部の大乘經を書寫して
埋ませたまふ軸より木槵樹乃
木生出たるそれこの木をもつて
數珠とし念佛百万反申さは
往生極樂のまもりとなりたま
夢さめぬかんはあるこ案さき

三下詞

清霊参ゝり　ゝのゝ風き銀むれす

きりありゝ姫ゞ女あち中殊人ゝに

山神中は庵し出ゞ時今信ら来ん

木穂椅をこ好中ゝ庵しゞ世方へ

清出なん　早　さゝゝは座のゝ由信

中ん庵し　三下　ここ神よ神明稲葉里

七社乃神ゝをはじめひ中さる神ん

ゞもここ那こゝ是天神よゝて清座ん

あさにみえゝ風きりたゝ以方

由物のゝゝ里は木穂椅よりなん

ゞ以清きも能ゝ清ホうりなん

下詞

あ里ふきや神も仏も一体とは

中さとも天神因果の清能羅ゝ　ゞ上ゲ九一

始めて言ふ里作　うゝん乃座此

作座かゞりにりし絶ぬ天神乃
弥陀一体の御値遇天神と
申すなれ本地救世観音より
ましますやなよくは見えし
さてもちかなわゞ菩霊山の法華
只在西方の阿弥陀娑婆示現
観世音 三世利益同一体

天が神や 仏とは たゞこうか
水波の隔てゆく神仏一如なる
寺社の花あまうのみ量しぬ
神乃宮ならうはもと寿ぐ綿一
あまりしける神力も仏説も
同じ和光のうきみきそ拝せう
末法とりまじりはく 末伝乃

蒼穂乃七ゞ五ゝの時代より王ゐさ
神も濁世よ悪しき紛ひて悪く
西よりけわ紛ふ二月下の
天月にしも影を出で給ひ
はゝばゞ太宰府乃里より梅花あけて
様ゝの御神物をしらしめす代
値遇乃結縁ふかく一流る

なじ角ゑもと万ゝぬ花のゝ乃
冬籠の露も志かるゝわ
君りも世花乃梢を超へくも
うるはしまたよ梅望みゆる
とのはなりめきちり咲き志ゆう
かうけなる梅も流しゝに
習しを路らぬ旅の空なまおふ

へはくしとて天降ひ那の園よ
ろまけを針ひうはあよわは
都府楼のうり〳〵観音寺乃鐘の
聲耶音よ驚くおわく左れ乃
表縁を思ひ以てぬと貴を明し
家をはなれて三四月落る涙を
百千乃萬事ハ此夢のことし

よわくひさうひをこほとゝふ
君は心乃いうわよやぎいふる
北闕よ逝ひをふてほしわ
ろふる面影イし恥をきを母伝
かりしたわと清神慮あらうふ
まての恨ミ晴し乃よ嫉ひ
かのまよひしや天満神徳うめてる母

うゑしは　しるよき飛や草も
木もゞ皆成佛のこゑきく
たまをはらぬるひろまりな
枯はあふうるも捨ひ乃花に
さくそうしまてやめいもさせ
木穂梢花さき見所る浅瑞よ
実や菓咲みなるな梢のいろも

あまたよるゝ乃ふ成となつは
さとりるをかりひのたから乃
なの法り　あ乃梢此このこゑ
さうごの数珠のみのわなれ必
さ法華やきんとくゞの人悪心る
みはたゆうとまるまゝ勇天神
の法使げめなは流とりね太まる乃

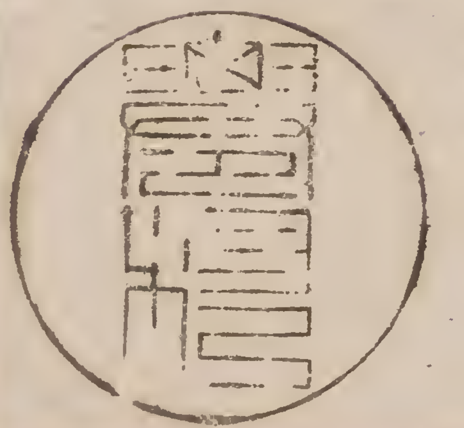
神とゝおゐ那くゞの霜くるわ
しろ妙くわや志もくもすゞり
安にくわひき子さのだかまよ乃
ゆはよの神あうひゞゆ分思出も
おもしろや薬楽乃風くく
とわくりゞく琵琶琴和琴
笛竹のゞ声はまりともほときの

役者などやなうきさうしうたま
ゞゆうきゑゆそよゆまちたさふ
ほまもか風く宮寺乃ゞつゝはら
とりしひめいくたわゆよ
白太まのしむ七社乃はし前よ韓
神儀馬楽ごうつや笛篳篥子の
風くとはしるしんやしる太夫

シテ　おりくさえ木もくろへ小さも咲
ぬふうよ白太まりゞ星霜はもふ
おひり芳しき風くなはゆふし
たまのふ庵し　いやとよそれ役
きたまわらわゞゆうきそ風なく哉
なりへきこそわ　シテ詞　梅ハ紅すとも
時めまし　梅花楽そ　かうの人

きりりし　よは火のけや
あを巻のたまのききしや巻ふ
雲中にくしきて太吉り小鳥乃
袖よりわどる風しやくひやうし
とうく見ゆるもふ老の
浪乃音の志て太まりかとよ乃
じやくひやうしをおもしろや

たゝその眼ほゝ霧の曲く
七徳まうしや宝七猶子ひき哉
ざれはして仏をうやまひまゐらせ
うひかまはゞ魔縁を獲ずぞ心
そなり長寿をまもり千秋楽
みは民を安くなひ萬歳の寿は
寿をのぶる法のむしろをしめ

きんの枕ハ被ざんをたたんと貴
本穂猶乃こすほりかけまて
みかや一味の雨風をそゝきそ
えゐくしわざみをみかひ
おとしての錦のまきやまり
あさんほのごとくきわりひの
珠をつりぬく数ハ百八煩悩乃

ぶんハ百八煩悩をてらさとる鐘
珠乃ぶちるのうしばくみえり
かくる玉箸ハきゑふかわ